評あり、今「糺卽軍字」の解の如きも、思ふに遼史國語解に遙輦糺（糺は糺に作るべし）を解きて「遙輦帳下軍也」といひ、糺轄（糺は糺に作るべし）なる語を說きて「糺（同上）軍名」といへるが如きに基きて直ちに此の解釋を施したるものなるべく、其の說く所必らずしも大なる價値を有するものにあらざるべし。さて學士の引かれたる所によれば、白鳥博士の解說は只だ「糺軍字也」を糺は軍の義なりと解かれたると、遼史の炒伍佤を蒙古語 šāgor, 燕北雜記の沙離を šāri, 蒙古語 cherig を šāri の更に轉訛したるものと說かれたるに止り、此等の šagor, šāri, cherig 等と、軍の義なりといふ糺 (tu, tyu) とを同一語なりと說かれたるは全く學士の見解に出づるが如し、されども余は之に對しては、如何にしても贊意を表する能はず、何となれば「糺」には「軍名」もしくは「軍」の解釋こそあれ、šagor, šāri, cherig 等に相當する「戰」なる解釋は絕えて存せざるなり、「軍」と「戰」とは國語に於てこそ同義に用ゆる場合もあれ、漢籍に於ては截然たる區別を以て記さるゝこと余輩の辯を須たざるべし、更に華夷譯語所載の女眞語に就いて考ふるに「瑣里都蠻」なる語を「戰」とも譯し、また「厮殺」とも譯せり。(Grube, Die Sprache und Schrift der Jučen. S. 24, u. 25) 此の語形は滿洲語法の上より考がふれば、蓋し sari+tu+mbi にして sari は名詞、tu は名詞を動詞に爲す時の接語、而して mbi は動詞の直說法現在の形なること明らかにして、滿洲語の sarindu-mbi（戰ふ）に相當し、瑣里卽ち sari は語根にして戰なる名詞なり、燕北錄の「沙離是戰」といへるものはもとより正しき解釋なり、然るにまた同書に「鈔哈」(čʻao-hāh) なる語ありて之を「軍」と譯せり（同書第十六頁）、此の語は Grube 氏の解せるが如く滿洲語の čʻoha にして「軍」の意なり、されば滿洲語、女眞語に於ても軍と戰とはまた明らかに區別されたるものにして契丹語に於てももとより然りしを疑はず、然るに今此の相異